

討議内容

【4 グループ】（討議内容詳細は資料編を参照）

国土館大、東京電機大、神奈川工科大、関西大、松山大、関東学園大、東京薬科大、株式会社 廣濟堂

最初に各校から自己紹介を兼ねて学習ポートフォリオ、学生カルテについて現状の取り組みについて情報交換を行った。各校とも学生カルテの導入や現状の課題、改善策等の討議を希望したため、学生カルテを中心として討議を行い時間的な余裕がある際、学習ポートフォリオについて議論することとした。まず、全員の理解を一致させるために「学生カルテの定義」「学生カルテの利用目的」の討議を行った。

学生カルテは下位層の学生指導のためのツールとして利用するだけでなく、積極的に利用することで学習ポートフォリオへつながると考えた。例えば、学生の情報が共有されているため表彰を受けた学生に学食等で会った際、学生の名前を呼び表彰を褒めることで学生のモチベーションが上がり、大学全体で実施することで学生は「教職員が見守ってくれる」という安心感が生まれる。

安心感はポジティブな考えや行動の原動力になるため、主体的な学習ポートフォリオやコンピテンシーの向上、キャリアサポートへと広がると考えた。学生個人の基本情報を含め、相談、悩み、就職活動等の内容を理解しているため、保護者からの問い合わせや企業からの問い合わせに即時に対応できるようになる。これにより保護者は「学生を見守ってくれている」という安心感に。企業等からは「学生の行動を把握している大学」という安心・信頼感を得られる。相談内容を詳細に分析していくことで相談内容から授業内容、カリキュラムなどの改善の手助けとする。また、学生からの質問内容をデータベース化することで学生の特性などを把握する手助けとする。

大学は高等教育機関であるため、知識の詰め込みよりも「生き方」を身につけ、その目的を達成するためのサポートを学生カルテや学習ポートフォリオを活用して行うことが大切。

他大学で実施している方法を参考に自分の大学用にアレンジすることで積極的な活用ができる学生カルテを作成することができる。情報の共有化が学生カルテのメリットであるため、学生カルテが導入できていない現段階であっても他大学から自分の大学への質問を受けた際、回答できない内容があることは情報の共有ができていない証拠となる。この状態で学生カルテを導入しても同じ結果になりかねない。

今回の研修及び学生カルテの導入をきっかけに情報の共有化を図る対策を立て、実行することが大切である。実行するにはポリシーやマニュアル作成が必要となり、これを作成することで教職員へ情報共有化の意識付けともなる。

始めは課単位もしくは学部単位のみで実施していくことで情報を共有したことの成功事例、失敗事例を積み重ね、失敗例は即時に訂正・修正し、成功事例を使って学内全部に浸透するよう教職員への積極的な活用・PRが必要である。

今回のこの研修で得た情報を大いに活用することでスムーズかつ効果的な学生カルテを作成・運用することができる。学生カルテの運用・作成・問題点解決の原点はここからである。